旧韓末の日語学校(補遺)

稲　葉　継　雄

はじめに

筆者は去る1984年，旧韓末（日韓併合直前）の韓国において「日語学校」と総称された一群の学校の研究に着手し，爾来次のような論考を発表してきた。

①光州実業学校について　筑波大学外国語センター　『外国語教育論集』第7号　1985年3月

②東亜同文会の韓国における教育活動　昭和59年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書　1985年3月

③達城学校について　筑波大学外国語センター　『外国語教育論集』　第8号　1986年1月

④韓南学堂について　筑波大学文芸・言語学系　『文藝言語研究』　言語篇10　1986年2月

⑤大日本海外教育会の旧韓国における教育活動　昭和60年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書　1986年3月　（京城学堂について　教育史学会紀要　『日本の教育史学』　第29集　1986年10月）

⑥釜山開成学校について　筑波大学地域研究研究科　『筑波大学　地域研究』4　1986年3月

⑦官立漢城外国語学校について――日語学校を中心に――　東京・韓国研究院　『韓』　通巻第103号　1986年8月

⑧仁川日語学校について　筑波大学文芸・言語学系　『文藝言語研究』　言語篇　11　1987年1月

⑨東本願寺の旧韓国における教育活動　筑波大学地域研究研究科　『筑波大学　地域研究』　5　1987年3月

⑩鮎貝房之進・与謝野鉄幹と乙未義塾　東京・韓国研究院　『韓』　通巻第

109号　1988年2月

⑪源興学校について　筑波大学文芸・言語学系　『文藝言語研究』　言語篇 15　1989年2月

⑫日語錦城学堂について　筑波大学外国語センター　『外国語教育論集』第11号　1989年3月

⑬一進会の教育活動　筑波大学地域研究研究科　『筑波大学　地域研究』 7　1989年3月

⑭浄土宗の旧韓国における教育活動――日本語教育を中心として――　筑波大学文芸・言語学系　『文藝言語研究』　言語篇　16　1989年8月

上記拙稿において直接間接に言及した日語学校は次のとおりである（重複は省く）。

①光州実業学校

②平壌日語学校・羊角島日語学校・平壌南門外日語学校・平壌日語夜学校・城津学堂・城津学堂鶴坪分校・鶴坪日語学校

③達城学校・日新学校

④韓南学堂・韓南学堂分校魯城論山忠仁学校

⑤京城学堂・三南学堂・龍山学堂・水原学堂

⑥開成学校・開成学校旧館支校・開成学校釜山鎮支校・東萊日語学校・馬山浦日語学校（私立開進学校）・密陽開昌学校・慶州府鶏林日語学校・機張日語学堂

⑦官立漢城日語学校

⑧仁川日語学校

⑨草梁学院（釜山学院）・統営日語学校・興仁日本語学校・時習学塾・群山小学校

⑩乙未義塾

⑪源興学校

⑫日語錦城学堂

⑬光武学校など一進会立の諸学校

⑭開城学堂・大邱日語速成夜学校・海州学堂・通度寺明進学校・精華女学校・日宗教会日語学校・定州日語学校・金泉日語学校

これらは，従来一般的にいわれてきた主要な日語学校およびその周辺の学校であり，一部，筆者が研究の結果新たに日語学校と規定したもの（乙未義塾・一進会系諸学校など）を含んでいる。しかし，日語学校として一応名の通った

もの，また，一般には知られていないが日語学校の範疇に入れて然るべき学校は，この他にも少なくない。そこで本稿は，これまで筆者が触れてこなかったそれらの学校を列挙し，旧韓末日語学校の存在を網羅しようとするものである。

1. 安城学校

京畿道安城にあった安城学校は，1900年前後の韓国教育界において割合に名の知れた日語学校であった。だが，その起源を知ることのできる資料は，僅かに次の『皇城新聞』記事を見出しうるのみである。

今を隔てる四年前から日本人福地辰蔵渡辺多蔵両氏が安城郡に日語学校の端緒を開いたが，今，両氏が，該校を拡張する計画をもって漢城に来り，有志者の賛助を求めているという(1)。

この記事は1899年12月26日付であるから，安城学校は1895年に創立されたことになる。また，創立者は福地辰蔵(2)と渡辺多蔵で，両名は，少なくとも4年間，二人三脚で安城学校の運営にあたったことが窺われる。

上の『皇城新聞』の報道からおよそ1年を経た1900年11月17日に安城学校を訪れた渋沢栄一一行の日誌に次のようなくだりがある。

午前九時安城ニ入リ，福地辰蔵ノ安城学校ニ立寄リ生徒ヲ集メテ元治氏之ヲ撮影ス，十五才ノ生徒金七星ト称スルモノ（一ニ安村星七ヲ和称ス）最モ日本語ヲ好クス，近刊ノ太陽等フリガナニ就テ之ヲ読メリ，生徒十数名君が代ヲ唱ヘテ予等一行ヲ迎フモ殊勝ナリ，軈テ予等ノ此処ヲ辞セントスルヤ，彼等一同ハ福地辰蔵ノ先導ニ依リ，列ヲ為シテ予等ノ行ヲ送ル事半里余，此間四百余州ノ唱歌ヲ歌ヒ，又殊ニ鶏ノ林ニ風立チテノ歌ヲ唱スルニ至リテハ，何トナク不愍ノ感ヲナセリ，兎モ角外国ニ来リ而カモ僻陬ノ地ニ於テ日語学校アリ，組織ノ不完全ニシテ我往昔ノ寺小屋（ママ）ニモ及バサルハ勿論ナレトモ，此ク日本人タル吾吾ヲ款待スルニ逢フ，心気愉々ノ至ナリ(3)

この日誌は，安城学校の具体的状況を記録した資料として最も詳しいものであり，われわれに多くの示唆を与えてくれる。第1は，「福地辰蔵ノ安城学校」

となっている点である。前掲『皇城新聞』記事によれば，福地辰蔵と渡辺多蔵が対等の関係にあった感があるが，1900年11月以前に福地のリーダーシップが確立していたことがわかる。(なお，これ以後の資料でも福地は安城学校の校長とされており，一方，渡辺の名は全く登場しない。)

第2は，日本名を名乗り日本の歌を歌う生徒たちの親日ぶりである。それは，日本人たる渋沢一行をして「何トナク不愍ノ感ヲナ」さしめるほどであったという。換言すれば，福地辰蔵らはすでにこの時点で，韓国人生徒に日本語および親日性を注入することに成功していたのである。

第3は，安城学校の「組織ノ不完全ニシテ我往昔ノ寺小屋ニモ及バ」なかったことである。福地と渡辺が漢城において有志の賛助を求めたことは先にみたとおりであるが，それから1年を経てなおこの状態であったのは，すなわち学校拡張のための募金運動が効を奏しなかったことを意味するであろう。ちなみに，この時期（1900年11月5日）に発行された『教育時論』には，安城学校の出席生徒は15名とある[4]。

その後の安城学校は，1901年9月出版の信夫淳平著『韓半島』で「京畿道安城に福地辰蔵氏の安城学堂あり」[5]と，その存在が確認されているのを最後に消息を断っている。したがって，あくまでも推測の域を出ないが，1902年9月に私立安城小学校が設立されており，この小学校が，形態は書堂とほとんど変わらず教育内容は語学を主とした[6]ことから，安城学校の後身である可能性がないことはない。

2. 洛淵義塾（普光学校）

韓国における朝鮮近代教育史研究の先駆者李萬珪は，洛淵義塾について次のように記している。

一九〇一年に徐光世・李光鍾・朴晶東・閔丙斗の四人が洛淵義塾を設立し，さらにこれを普光学校と改名した。初めは日語と普通学科を教えたが，後には民間師範科として一時人気を引き，遠い田舎からまで応募生が集まった名高い学校であった。一九一六年に廃校した[7]。

その後の韓国人研究者たちも，この域を一歩も出ていない[8]。換言すれば，韓国では，洛淵義塾において日本語が教えられたことは認められているものの，

そこに日本人が関与したことは一切触れられておらず，同塾は民族系（非キリスト教系）私立学校のひとつであったとされているのである。しかし，洛淵義塾は，単なる民族系私学ではなく，いわゆる日語学校の範疇に属した。

洛淵義塾の設立を報じた最初の記録は1899年８月８日付の『皇城新聞』で，その内容は次のとおりである。

小笠洞の金鳳基氏家において洛淵義塾を設立し，日語を教習するが，学徒は漸増し，その教師日本人尾田満氏は，風雨を厭わず教務上非常に誠勤中なりという。

これによって，洛淵義塾が，李萬珪らのいう1901年ではなく1899年８月，日本人尾田満が教鞭を執る文字どおりの日語学校として発足したことがわかる。1900年５月11日付の『皇城新聞』によれば，教師は，尾田満から中林猪作に代わっているが，依然として日本人ひとりであり，教育内容も日語だけである。

洛淵義塾の教育内容が日語プラス普通学（算術・地誌・歴史）となったのは，1904年の秋学期からであった。当時の新聞に，「洞口内私立洛淵義塾では，従来日語だけを教授していたが，今次の秋期開学以後，日人教師を礼を以て迎え，学課を拡張して熱心教育するので，学員が月加日増する」(9)とある。

1905年８月，洛淵義塾は名を改めることになり，９月１日を期して普光学校がスタートした。しかし，校名変更に伴う教育内容の変化はなく，日語・算術・歴史・地誌と従前どおり日語が教科目のトップに挙げられていた。

このような教育体制に一大改編が加えられたのは，普光学校開学１年後の1906年９月のことであった。この時の学員募集広告によれば，「本校においては夜学科を廃止し，昼学として教務を拡張し，高等普通科を速成によって完全に教授する」(10)ことを謳い文句に，教科目は修身科・国語・教育学・作文・法学・経済学・理科・日語・算術・地誌・歴史・図画・体操へと大幅に拡充されている。日語の比重は，一挙に小さくなったわけである。また，教科目中に教育学が含まれていることから，この時点で，李萬珪いうところの「民間師範科」になったものと思われる。普光学校の日語学校的性格は，ここで一旦とぎれたといってよい。

ところが普光学校は，1907年９月，日語専門科を特設している。この日語専門科は，官吏および一般社会人を対象とする夜学（毎日午後５時から６時まで，期間１年）であったから，普光学校にとって夜学の復活は，専門的な日本語教

育の再開に他ならなかったのである。この1年後の1908年9月には夜学の再編が行なわれ，日語・算術・簿記の3科編成となっているが，1909年5月22日付の『大韓毎日申報』に普光学校日語専門速成科（毎日午後5時から6時まで，期間6ヶ月）の学員募集広告があるところをみると，夜学は再び日語科のみになったようである。

以上みたように洛淵義塾・普光学校は，発足当初は純然たる日語学校であり，暫時，算術・地誌・歴史を含む広義の日語学校であった後，昼間部としては師範学校的色彩を帯びた中等レベルの学校へと発展したが，間もなく夜学として日語科を復活させた。そして，この昼・夜学の二元体制を維持しつつ日韓併合を迎え，1916年まで存続したものと思われる。

3. 湖西学堂

公州・湖西学堂に関する資料は多くないが，その限られた資料においても曖昧な点がいくつかある。そもそも学堂の設立年月からして明確でないのである。統監府の『韓国事情要覧』は，湖西学堂の沿革を次のように記している。

明治二十九年日語研究会ヲ開ク同三十一年四月ヨリ普通学ヲ教授ス同三十四年居留民ヲ併セ教育ス[11]

すなわち，1896年に「日語研究会」として発足し，1898年4月には普通学をも教授する学校になっていたというのである。

これに対して『東亜同文会報告』には，「湖西学堂は忠清道公州にあり。明治三十三年一月，同地在留の商人菅辰次郎氏が商業上の利得を投じて独力創設したるもの」[12]云々という記述があり，創設者（兼校長）の名を挙げた上で設立時期を1900年1月としている。

これらふたつの資料を総合して，「日語研究会」から発展した学校が1900年1月に改めて湖西学堂となったと考えれば平仄が合わないことはない。しかし，「菅辰次郎氏が……独力創設した」とあるところから，それにも無理があることは否定できない。渡部学の先行研究において湖西学堂は，東亜同文会の本格活動開始（1899年）以後に設立された多くの日語学校のひとつとされている[13]ので，本稿ではこれも参考にして一応1900年1月正式開校説を採っておくが，あくまでも断定は避けたい。

次に，校長の氏名についても決め手に欠ける。上にみたように『東亜同文会報告』では菅「辰次郎」となっているが，『近衛篤麿日記』では菅「辰太郎」[14]，雑誌『教育界』では菅「道太郎」[15]とまちまちである。ただ，『東亜同文会報告』が，第17回と第19回の2号にわたって菅「辰次郎」とある[16]ので，最も信憑性が高そうである。

いわば第3の不明点として，湖西学堂の最期も明らかでない。1905年夏，野尻精一が，「水原には三輪政一氏の華城学校，公州には菅道太郎氏の湖西学堂，江景には薬師寺知朧氏の韓南学堂，大邱には膝付益吉氏の達城学校など孰れも私立で生徒は五六十名から百名内外あり，……数年前内地に設立せられた日語学校即水原，公州，江景などの日語学校の設立の初は各種の困難があつたけれども近年殊に昨年以来，日本の勢力が盛んになつて来たと共に何れも入学希望者は続々増加する有様である」[17]と，湖西学堂が日露戦争を契機として校勢を拡大しつつあった状況を伝えているが，これ以後の関係資料は前掲『韓国事情要覧』以外見出されない。韓国人教育と居留民教育を兼ねた学校のほとんどがそうであったように，韓国新学制の発足（1906年9月）後，湖西学堂においてもなんらかの改編があったことは充分に考えられるところである。

4. 華城学校

華城学校の創立は1900年，設立者は鶴谷誠隆[18]であった。1900年11月16日付の『皇城新聞』雑報欄に「日人鶴谷誠隆氏が，水原郡に語学校を設け学徒を教育すると，外国語学校長に認許を請うた」とある。私立日語学校の開設にあたって官立外国語学校の校長に認許を請うたというのは，当時の日本語教育事情を知る上で注目されるところであるが，ともあれこの記事によって華城学校が鶴谷誠隆によって設立されたことが確認される。

これに対して，酒井政之助編（1914年発行）の『発展せる水原』には，水原に「初めて永住的に入込んだ内地人は乗松宣教師で時は明治三十四年であつた，……（中略）……続いて翌年一月野中末吉氏が移住して菓子商を営み，……（中略）……次で同年六月三輪政一氏が来住し華城学校を起し，親しく教鞭を取つて鮮人を訓導した」[19]とある。すなわち，華城学校は，1902（明治35）年6月に来住した三輪政一が起したというのである。これは，三輪の校長就任によって華城学校が漸く軌道に乗ったことを意味するであろう。三輪は，華城学校の第3代校長であったが，後人が彼を設立者と見做すほど，華城学校にとっ

て三輪の存在が大きかったことは事実である。先の引用文をもじっていえば，鶴谷ら三輪以前の華城学校関係者は，水原に「永住的に入込んだ」のではなかったことになる。

華城学校の財政は，「京城在留の日本人有志，領事，軍人等の寄附金，京釜鉄道会社よりの家屋貸与などによって援助せられて」[20]いた。しかし，これだけでは充分でなく，三輪は，仁川居留地においても資金を募集した。1904年の5月から7月にかけて韓国学事を視察した恒屋盛服は，「但基礎薄弱ナルガ故ニ三輪氏ハ仁川居留地ニ来テ資金ヲ募集シタルニ居留民モ同情ヲ表シ六百円ヲ醵出シ又仁川領事加藤本四郎氏ハ其管轄区内ナルヲ以テ暗ニ之ヲ保護シ居レバ引続キテ維持シ得ルナラント信ス」[21]と報じている。また，当時の『大韓毎日申報』には，「水原から来た人の伝えるところを聞けば，先日，長谷川大将と林公使および諸官員が水原に赴いた折華城学校に遊覧し，補助金を各々数十円ずつ贈与した」[22]という雑報記事がある。要するに華城学校は，京城および仁川の日本官民有志の補助によって支えられていたのである。すぐ近くに京城・仁川の2大居留地を控えるという意味で，水原の華城学校は地の利を得ていたということができる。

次に，華城学校の設立趣旨ないし教育目的をみてみよう。これに関して，1905年2月から1906年6月まで学政参与官として韓国教育行政の衝に当たった幣原坦は，「日語学校設立の趣旨は，いふまでもなく，朝鮮人に日本語を授けて，国交の親善に資せんとするのである。今例によつて之を証すれば，……(中略)……水原の華城学校にあつては，『韓人の教育は，生徒のみに限らず，其の地方一般の韓人を教化し，日本の政策及び日本人の為すことに対して妨害をなし，又は悪感情を抱かしむることなく，唯何となく良き感情を以てこれを歓迎し，万事周旋の労を吝まざるに至らしむるにあり，』といふ如き類であつた」[23]と述べている。これによって，華城学校が，生徒のみならず一般社会人をも教育対象としたこと，彼らへの日本語教授を通じて親日意識を養おうとしたこと，が窺われる。これに対して，華城学校の当事者たる三輪政一の述べるところは，次のように，より直截的である。

如何なる点より考ふるも日本人は韓半島に繁殖せざるべからざるものなり，又韓半島は日本人の繁殖に依て益々幸福を得るものなり，依て余は韓人に日語を以て日新の科学を授け，而して深く我帝国の真意を諒せしめ，今迄とは全く反対に日本人を歓迎せしめ，如何なる日本人と雖ども容易に慣るを得しめ，

（中略）相互の利益幸福をして益々増大ならしむるを以て方針となす[24]

すなわち，「日本人は韓半島に繁殖せざるべからざる」ことがまず大前提としてあり，「韓人に日語を以て日新の科学を授け」「今迄とは全く反対に日本人を歓迎せしめ」ることは，その手段とされているのである。なお，上の三輪発言にいう「相互の利益」とは，「韓国は農業国にして日本は工業国なり，故に此国の天産物と我国の製造品とを交換するが如きは，相互の利益」であって，これによる「貿易額の年を追うて増加するは統計の明示する所今後益々之が隆盛を図らざるべからず，於是乎日韓両国人の交際を親密にすること肝要なるべし」[25]というのであった。この後の植民地侵略に通じる意図がかなり明確に読みとられ，これが華城学校の本質であったとみることができる。

ところで，幣原も三輪も異口同音に認めているのは，華城学校設立当時の韓国社会に反日的気運があったことである。日本は日清戦争に勝利したものの，その後三国干渉（1895年4月），閔妃殺害事件（同年10月），高宗の露館播遷（1896年2月）などが相次いだことにより威信を失墜し，日本人および日語学校は，いわば歓迎されざる客となっていたのである。したがって，華城学校の生徒数は，1900年には10余名に過ぎず，翌1901年も30余名であった。しかし，1902年になると，「今迄の校舎に入る能わざるに至」[26]ったという。この原因を，先に触れた恒屋盛服は，「主管者三輪俊一（ママ）氏ノ熱心ナル誘導ニ由リ盛況ヲ呈スルニ至リタリ」[27]とみている。そして，生徒数増加の決定的要因となったのが日露戦争の勃発であった。しかも華城学校の生徒は，日本軍に積極的に協力する姿勢を示した。これを報じた雑誌『教育界』の記事は次のとおりである。

華城学校生徒四十六名は，軍資金として四十四元八十銭の寄附を申出でしかば同校長三輪氏は特に領事館に持参し，其の手続をなしたり。尚同校生徒の中日本語に通ぜる四五名は，通訳たらんことを志望し居れり。奇特のことゝいふべし。[28]

日露戦争の日本有利の展開とともに華城学校の生徒数は更に増加し，最終的には100名に達したようである。幣原坦によれば，京城学堂・釜山開成学校と並んで「水原の華城学校の如きも殆ど百名，是等が先づ生徒の多い所であつた。」[29]

1906（明治39）年9月，華城学校はひとつの転機を迎える。それは，三輪政一が韓国人教育と同時に手懸けていた日本人教育の分離独立で，その間の経緯は次のとおりである。

水原に於ける教育機関として先づ内地人側の学校組合立尋常高等小学校は，実に明治三十九年九月の創立にして，従前は華城学校主三輪政一氏が篤志を以て，鮮人教育の傍教鞭を取つて居たのである，然し時勢の進運は独立した教育機関の必要を感じ，時の居留民総代と評議員が大に苦心計画の上，統監府に請願し一時金参百円毎月補助金参拾五円の下附を仰ぐことゝなり，漸く目的を達し華城学校の校舎に修理を加へ，元福岡県師範学校訓導奥園悦次郎氏を校長に任用した[30]

日本人小学校の創立は，三輪の負担を軽減したという意味で華城学校の更なる発展の契機になったものと思われる。しかし，華城学校がその後どのような推移をたどったか，遺憾ながらこれを跡付ける資料を見出しえない。

ちなみに，日語学校において日韓人の教育が併せ行なわれ，これが日本人小学校の母体となった例は大邱・達城学校や江景・韓南学堂などにおいてもみられ，華城学校だけの特異な現象ではない。

5. 開揚学校

慶尚南道教育委員会編の『慶南教育史』は，年代の誤りやミスプリントが多く非常に杜撰な資料であるが，なんとか辻褄を合わせながら開揚学校（金義煥の『釜山近代教育史』によれば「開陽学校」）の歴史を再構成すると次のようになる。

慶尚南道東萊には，1846年以来耆英会という「親睦，敬老，救恤，地域発展など独特かつ多様な事業を展開した特殊な団体」があったが，この耆英会の会員辛明録が中心となって1900年に東萊日語学校を設立した。その趣旨は，「日本語を学習させて日本の先進文化を取り入れよう」というのであった。

ところが，1903年に至って東萊日語学校は，公立小学校によってそれまで借家であった校舎の追い立てを食い，行き場を失って解散することになった。そこで有志たちは，この問題を釜山開成学校校長荒浪平治郎に相談，その結果，荒浪の紹介で開成学校中等部の教師であった芥川多仲らを迎えることになり，

東萊府書契所において新規に学校の門を開いた。これが開揚学校である。開揚学校は，荒浪平治郎を校長に仰ぎ，日本語および小学校課程を教授した。生徒は，年を食った者が多かったという。

開揚学校が経営難に苦しんでいた1907年1月，東萊耆英会が三楽学校を発起した。「東萊に小学校である開揚学校があるが，多くの生徒を収容することが難しいばかりでなく，小学校を卒業した後さらに進学する学校がなければ，教育を何によって発展させるのか」というのが，その大義名分であった。すなわち三楽学校は，小学校プラス中学レベルで，たてまえとしては開揚学校の受け皿的な学校だったのである。しかし，それに止まらず耆英会は，開揚学校そのものの吸収合併を意図していた。三楽学校の発起に際してすでに，「開揚学校が今すぐに廃止されるが，その学校の生徒はすべて小学校卒業程度であるので，この学校（三楽学校――稲葉註）で一緒に教育すること」を謳っているのである。

三楽学校の開揚学校吸収は1907年11月5日に実現し，これを機に学校は，名を東明学校と改めた。東明学校は，日韓併合後も存続し，1916年，私立東萊高等普通学校となっている[31]。

上にみたように開揚学校は，東萊日語学校の後身であり，人間関係（荒浪平治郎と芥川多仲）からして釜山開成学校の分身であったとみることができる。教員に関してはまた，1905年3月3日付の『皇城新聞』に，開揚学校は創立3年目にあたり，東萊郡紳士および各地有志の補助によって財政を立て直し，日本人女教師星野貞が熱心に教育している，という雑報記事がある。要するに開揚学校は，日本人教師によって主導された日語学校だったのである。

ところで，日本側の資料である『釜山港勢一班』は，開揚学校という学校が存在したことを認めていない。すなわち，1905年当時の釜山開成学校の支校・補助校一覧に東萊日語学校を挙げ，その備考として「同地公立小学校ト合併（当今分離）」と，途中で学校改編が行なわれたことは明示しているものの，校名は一貫して東萊日語学校であったかのような印象を与えているのである[32]。この資料は，後世の研究者にとって基本資料のひとつとなっており，開揚学校が世に知られていないのはこれによるところが大きいといってよい。ただ，1905年時点の支校・補助校一覧に東萊日語学校が挙げられているということは，開成学校が，東萊日語学校のみならず，実はその後身たる開揚学校にも財政補助を続けていたことを証明している。

なお，開揚学校を吸収する直前の三楽学校が日語を教科目のひとつとしてい

たことは事実である[33]が，三楽学校もいわゆる日語学校であったとまではいえない。

6. 海州日語夜学校

1904年1月15日，海州居留日本人総代矢島賢造が海州日語夜学校を開設した。しかし，日露開戦に伴う混乱の中で早くも5月4日には休校に追い込まれている。この間の経緯は，同年6月3日に同校を視察した恒屋盛服の次の報告によって明らかである。

海州居留日本人総代矢島賢造氏ノ私設ニ係ル東門外耶蘇教会堂ノ一室ヲ借リ本年一月十五日開校シ矢島氏自ラ教鞭ヲ執リテ日本語洋算珠算ヲ教授ス五月三日生徒ノ現数十三歳ヨリ二十一歳マテ三十二名トナリ尚ホ増進ノ勢アリシモ矢島氏ハ商業家ニシテ総代ノ外郵便取扱人ヲ兼ネ平生ニ於テスラ閑暇ナキ身ナルニ軍隊通過ノ為メ多忙ヲ極メ実際教鞭ヲ執ル事能ハサルヲ以テ五月四日ヨリ中止シタリ矢島氏曰く西門外ノ紳商ヨリモ分校設立ノ請求アリ且日本語ノ気運甚タ旺盛ナレハ事情ノ許ス限リ之ヲ再開スヘシト矢島氏ノ如キハ最モ感スベシ因テ余ハ帰途仁川領事加藤本四郎氏ニ其現状ヲ報告シ置ケリ[34]

ここにあるように，矢島賢造には日語夜学校再開の意志があった。だが，同校は再開されなかったか，たとえ再開されたとしてもごく短期間だったであろうと考えられる。というのは，この年11月には浄土宗系の日語学校海州学堂が創立され，海州学堂は，翌1905年8月日本人小学校を併設，海州における中心的教育機関へと発展しているからである。海州居留日本人総代という矢島賢造の肩書からしても，海州学堂と競合する日語夜学校を独力で経営するよりは海州学堂への協力へと向かったと考えるのが自然であろう。

7. 求是学校

義州では1901年初頭，当地駐留の韓国軍人の間に日語学校の設立を要請する動きがあった。これを知った東亜同文会立平壌日語学校の校長真藤義雄は，同校義州分校の開設を企図したが，東亜同文会本部の同意が得られず，結局実現には至らなかった。それから3年後，この義州の地に求是学校が設立された。

平壌日語学校義州分校計画と求是学校との間に直接的な関連はないが，日本側に，半島西北端の要衝義州に親日勢力を扶植しようとする意図があったことは事実である。

求是学校の創立から1904年６月までの沿革は次のとおりである。

義州城内ニアリ校長ハ張応亮教師徐丙轍講師今給黎誠助氏ナリ張ハ漢学者ニシテ人望アリ徐ハ成城学校卒業生ニテ日語ニ通ズ張徐二氏ハ昨年（1903年――稲葉註）十二月頃ヨリ日語学校ヲ興サント欲シテ周旋甚ダ勉メ有志醵金殆ド成ラントスルニ及テ今給黎ヲ聘シ一月下旬開校シタリ然ルニ幾クナラスシテ魯兵侵入シ生徒ハ離散シ教師避難シタレハ校舎空屋トナリヌ其後我戦勝ノ結果人民帰住シタレハ六月六日ニ至テ再開スルヲ得タリト云フ余ノ視察シタル当時ハ学生十名許リアリ日語及漢文ノミヲ教授セシガ日語ノ熟スルニ及テ数学其他必要ナル学科ヲ授クル目的ナリト云フ今給黎氏曰ク予ハ精神教育ヲ以テ主眼トナセリト徐氏モ亦之ニ均キ言ヲ発セリ余ハ精神教育ノ不可能ニシテ且其結果ノ善良ナラサル所以ヲ切論シ実務教育ニ転換セシメント欲シタルモ果シテ其効アリシヤ否ヲ知ラス

本校ハ資金給セスシテ基礎薄弱ナルガ上ニ郡守具完喜氏ノ横暴ニ抗スル傾向アルヲ以テ折合悪ク妨害ヲ受クル事屢バナリト云ヘバ其維持頗ル困難ナラント察セラル後ニテ聞ケハ郡守ハ別ニ官立日語学校ヲ興サント企テ居レリト[35]

この視察報告書の筆者恒屋盛服は，「張徐二氏」が求是学校を興したといっているが，同じころ松宮春一郎は，同校は「韓人張応亮の設立」[36]といっている。いずれにせよ校長は張応亮であり，張のイニシアティブを認めている点は共通である。

上の恒屋報告にあるように，求是学校は，開校当初から波乱の連続であった。まず日露開戦（1904年２月８日）によって一時休校に追い込まれ，この試練は克服したものの，依然として資金不足と郡守の妨害という難題を抱えていた。恒屋は，「其維持頗ル困難ナラント察」していたのである。

この予想に反して，求是学校はその後も存続したが，1906年２月には再び難局に直面することになった。教師徐丙轍の逮捕事件がそれである。当時の新聞報道によれば，徐丙轍が学校の用事で上京した折，何故か警務庁に囚われの身となり，３月になっても帰らなかったので，生徒らが総代を送って警務庁，さらには学部に徐の釈放を請願している[37]。この事件は，求是学校の運営に支

障を来したという意味で不幸な出来事であった。しかし，生徒たちが，はるばるソウルまで代表を派遣して教師の身柄釈放運動を展開したことは，当時の求是学校における師弟間の絆の強さを窺わせるに充分である。

ところが，翌1907年になると，義州地方一帯の反日気運が学校にも及び，求是学校では生徒の大量退学という事態が生じた。同年7月31日，統監伊藤博文は外務大臣林董に次のように通報している。

一般人民モ亦前叙ノ如ク稍々排日熱ヲ減シタルカ如クナルモ近時排日熱学校ニ波及シ日本人監督ノ下ニ専ラ日語ヲ教授セル義州求是学校ハ一時生徒三四十名ヲ有シタルモ漸次退校シ当時僅ニ十三名在学スルニ過キス[38]

半島西北部地方は，日本の韓国保護国化に反対する教育救国運動の中心地であった。日本人の目から見れば，「就中西北鮮地方は，不健全なる私立学校の巣窟たるの観を呈した」[39]のである。反日意識は往々，日語学校イコール親日派と見做す風潮へとエスカレートし，その圧力が求是学校生徒の大量退学を招いたのである。したがって求是学校は，この後長くは続かなかったのではないかと思われる。

なお，冒頭引用文の末尾に「郡守ハ別ニ官立日語学校ヲ興サント企テ居レリ」とあるが，義州に官立日語学校が設立されたことはない。

8. 保東学校

1904年6月に保東学校を視察した恒屋盛服の報告は次のとおりである。

鎮南浦億両機ニ在リ校長ハ田錫永，監督白川正治，教師中井平三，鮮于叡ノ諸氏ニシテ井上義雄中西正樹二氏其創立ニ与リ力アリ海軍大将某モ此挙ヲ賛シ暗ニ幇助シ居ルト聞ケリ創立ハ昨年十一月ニシテ本年三月億両機呉潤民ノ家ヲ借リ正式ニ開業シタルナリ

生徒現数二十六名内第一級四人，第二級四人，第三級十人，第四級八人，英語科（副科トシテ教授ス）八人ナリ第一第二級生ハ稍ヤ日本語ヲ話ス然ル所以ノモノハ曾テ韓人紳商会社員ノ共立ニ係ル得英学校ナルモノアリ本邦人古藤遜，河島敏二氏モ之ニ関係シ明治三十六年一月開校シ東村ニ校舎新築ヲモナシタルニ該会社員中ニ軋轢起リ間モナク中止シタルヨリ同校ニ関係深キ田錫永鮮于叡

二氏従来ノ生徒ヲ率キ億両機ニ至テ白川氏ノ企図ニ合シタレハ割合ニ能ク日本語ヲ解スル生徒アリト云フ
経費ハ月額五十円乃至七十円ヲ要スレトモ確乎タル財源ナキヲ以テ白川氏ハ大ニ困難シ居レリ[40]

ここにあるように，保東学校は得英学校をその前身とした。得英学校に関しては，1903年３月24日付の『皇城新聞』に「三和監理高永喆氏の公報によれば，本港紳商会社員等が義捐金を集めて学校を私立し，校名は得英とし，漢文教師と日語教師を招聘して上月二十七日に開学した」とあり，この『皇城新聞』記事と上の恒屋報告を突き合わせると，得英学校は，日本人古藤遜・河島敏を日語教師として1903年１月27日に開学したことがわかる。教科としては漢文の比重も大きかったようであるが，当初から日語学校的性格が非常に強かったとみてよかろう。

保東学校の設立・運営にあたって白川正治の役割が大きかったことは明らかである。1905年夏に韓国教育を視察した文部視学官 野 尻精一は，「白川正治氏の鎮南浦に設立せる保東学校といふは昨年新設したものだけれども生徒は百名近くある」[41]と，白川を保東学校の設立者としているほどである。しかし，先の恒屋報告からしても，保東学校は「日韓有志の協力に成る」[42]とみるのが妥当である。

保東学校の創立時期は1903年11月であった。だが，この「創立」とは，単に学校法人的な形ができたというにすぎず，1904年３月の正式開校まで学校の実体はなかったようである。開校直前の２月27日に記述された雑誌記事「韓国鎮南浦に於ける教育状況の一班」に「韓人教育は邦人の手に成れるものは未だ当地には設けられず」[43]とあるからである。

次に生徒数をみると，1904年６月の時点で34名（英語科８名を含む），1905年夏に「百名近く」であったことは上にみたとおりである。また，1905年10月２日付の『皇城新聞』は，当時の保東学校の状況を次のように報じている。

三和港甑(ママ)南浦に設立された保東学校に学徒が二百十七人であるが，そのうち二十余名は，特別に政治経済法律等の科程で中等教育を受けるという。該教師日人白川正治氏は，元来，教育上有志の人士であり，数年前から該校において熱心勤業するので，校況がますます発達の効を奏するであろう。

すなわち，生徒は217名にのぼり，そのうち20余名は政治・経済・法律などの中等教育を受けていたというのである。このように保東学校は，開校以来生徒数が急速に増加したばかりでなく，その教育内容も，語学中心からプラス社会科学へと拡大されていった。

ところが，保東学校は，1908年2月に至って突然命脈を断った。前述のとおり開校当初から「確乎タル財源ナキヲ以テ白川氏ハ大ニ困難シ」ていたが，その後校舎を担保に日本の銀行から借りた15,000円が返せず，ついに身売りすることになったのである。「校名は一光と改称し，学科は小学を以て教え，陰正月初四日開校式を挙行」(44)した。一光学校を三和港紳商会社社長白時燦ら韓国人有志が引き継いだ点からすれば，保東学校の前身である得英学校の設立形態に復した格好であるが，一光学校については，具体的教育内容その後の推移ともに不明である。

9. 黄州日語講習所

黄州日語講習所の名が世に知られているのは，設立者兪星濬の兄吉濬の存在に負うところが大きい。兪吉濬は，1881年慶応義塾に入学した正規の韓国人日本留学生第1号であり，その後開化派の政治家あるいは学者として活躍した韓末の指導者のひとりであった。兪星濬は，兄を介して日本人の間に多くの知己を得ていたようである。

その知名度の高さに拘らず，黄州日語講習所はその名のとおり，学校というにはあまりにも小規模な講習所であり，設立時期さえも，1904年6月以前であったことは確かであるが，それ以上は詳らかでない。また存続期間も，少なくとも1905年11月までは存在したとしかいえない。1905年11月は，「日本語を教ふる私立学校の稍々知られたる」(45)もののひとつとして黄州日語講習所が挙げられている松宮春一郎著『最近の韓国』の序文が執筆された時点である。

参考までに，1904年6月6日に黄州日語講習所を視察した恒屋盛服の報告を次に掲げておく。

韓人兪星濬氏ノ私塾ニシテ現生徒八名アリ日語算術歴史ヲ教ヘ又講話ヲナス余ハ兪氏ト相知レルヲ以テ直ニ其講室ニ入リタルガ兪ガ方ニ新約全書ニ就キ幼童ニ対シテ講話シツヽアル時ナリシ兪曰ク新約全書ニモ路曹民約篇ニモ真理ノ存スルアリ僕ハ其真理ヲ摘取シテ講話シ以テ彼等ノ精神ヲ修養セシムト又曰ク僕

ガ生徒ハ八名以上ニ増加スルノ見込ナシ故ニ近日此八名ヲ携ヘテ暑ヲ山中ノ寺院ニ避ケ真理ヲ講スル積ナリト八九歳ノ幼童ニ向テ社会哲学ヲ講ズルニ至テハ其害アリテ利ナキヲ見ルノミナラズ韓人教育ナル問題ニ関シ大ニ考慮ヲ要スヘシ兪ハ亡命者兪吉濬氏ノ弟ニシテ十年流配ニ処セラレ鉄島ニ在リシヲ黄州郡守某黄州ニ帰住ヲ許シタルヲ以テ私塾ヲ開クヲ得タルモ同地人ハ奇禍ノ其身ニ及ハン事ヲ恐レ子弟ノ之ニ赴クヲ欲セス是其振ハサル所以ナリ同罪者ナル参尉金相得ナル者モ別ニ日本語ヲ教授シ居タル由ナルガ余ノ赴キタル当時ハ我工兵隊ノ通訳トシテ他ニ往キ不在ナリキ(46)

10. 義成学校

1906年3月19日付の『皇城新聞』は，「鎮校盛況」と題して鎮南郡義成学校の状況を次のように伝えている。

南から来た友の伝えるところを聞けば，鎮南郡義成学校は，設立が今から四年前で，範囲が小学を超越して中学および師範制度を希望するが，現今高等級が二十余名，中学課程の授業を受ける生徒が五名である。その（盛況の）根本因を究めると，本倅朴逸憲氏が，郡儒有志者金淇玉と（学校）発起の議に及び，適者日本紳士渡辺直躬氏は，東京府士族，東亜（同文）会会員にして教育に志があり，無報酬で自願教師となり，馬山駐在三浦領事が月額二十五円を補助し……

ここには，誤解を招き易い点がいくつかある。まず第1は，義成学校が4年前に設立されたとある点である。実際には，4年前（厳密にいえば約3年前の1903年5月）に設立されたのは統営日語学校であり，後述するように，義成学校としての発足は1904年10月のことだったのである。創立以来4年というのは，上掲記事が統営日語学校と義成学校を連続的に捕らえていることを意味する。しかし，両校は，その設立主体からみて別個のものと考えるべきである。

第2は，鎮南郡守朴逸憲が有志金淇玉とともに義成学校を発起したとしている点である。しかし，これはあくまでも形式にすぎない。義成学校のみならず，その前の統営日語学校から，実質的な創立・経営者は日本人渡辺直躬だったのである。

第3点は，金淇玉を「郡儒」としていることである。1902年夏当時，「開成

学校第二学年生金淇玉帰省中を利して望みの者に洋算を教へ現在学生十名許あり」[47]とあるように，彼は，鎮南郡統営（現，忠武市――稲葉註）の出身者であることは間違いないが，決して儒者ではない。むしろ，南韓第一の日語学校であった釜山・開成学校に学んだ，当時としては最も開明的な人物であった。

次に，統営日語学校と義成学校の沿革をみてみよう。1903年春，統営に渡った渡辺直躬は，早速私塾を開いた。これが統営日語学校である。5月16日の開校から約2ヶ月間の状況を渡辺は次のように報告している。

当校創立に付ては愚民共の反対最初の借家は近傍洞民の頑輩数十名団集或は不当の談判に押来り或は夜間投石を為す等関係甚だウルサク候に付中湾の西側なる半島の中に民家を買収候処矢張同様なる妨害を受け授業に差支候故駐劄大隊長等へも屢は協議致候得共職務違に付気の毒ながら致方なしと断はられ郡守へ交渉すれば未開港地なる当地に日本人の居住するは中央政府にて不都合と認め居るに況して学校を設立には便宜を与ふる能はずと刎付られ種々苦計の末本邦医師林重一氏所有の一小屋を買受け之に修繕を加へ纔かに継続致居候処今回は晋州観察使より学校厳禁云々の訓令あり又々面倒を惹起したれば馬山浦領事館に報告し領事の保護を請ふ事となしたり折しも大谷派本願寺釜山学院教師松浦抱月氏本山の命を帯び来り予期の通り本校を本願寺の管理となし経費の大部分は同本山の負担と相成候間先々安心致候是迄は経費金額二十円なるに前段の如き混雑打続き不時の失費を要し困難を窮め居候処其点丈は大に都合好く相成候洞民の反対と云へるも小吏以下愚昧の輩の仕事にて中流以上にして少しく文字を知れる者は皆大賛成なれば少く金力さへあれば如何様にもなり可申候
授業の成績は開校日浅き為め報告申す程には参らざるも目下生徒十三名外に日本少年一名孰れも非常なる熱心にて父兄の奨励も行届き候ゆゑ進歩著しく十三名の内四五名は日本語にて普通用語に差支なきに至れり開校は五月十六日なりしも校舎移転等にて休日多く実際の授業は三十八日に過ぎず斯る短日月にて右の如く速成せしは生徒が熱心の余り校舎に宿込み昼夜打通しの変則的課業に従事したる為めなり生徒の根気強きには感服の外なし[48]

文中，「折しも大谷派本願寺釜山学院教師松浦抱月氏本山の命を帯び来り予期の通り本校を本願寺の管理となし経費の大部分は同本山の負担と相成候」とあるのは，東本願寺釜山別院が，この1年ほど前から統営に日語学校を設立することを企図し，すでに準備工作を進めていたからである。したがって，統営

日語学校の東本願寺移管は，渡辺の個人事業に東本願寺が便乗したものとみることができる。

ところが，1904年9月に至って東本願寺は，財政難を理由に統営日語学校の経営から手を引いた。したがって，学校は再び渡辺の個人経営となったが，ここで渡辺は一計を案じ，同年10月，新たに日韓人共立の学校，すなわち義成学校を発足させた。この間の経緯を報じた渡辺の「統営通信」は次のとおりである。この通信の発信日が1905年12月23日であるから，文中の「昨年」「一昨年」はそれぞれ1904年と1903年である。

前略昨年九月本願寺ト分離以来一昨年此地ニ着シタル当時ノ状態ニ戻リ一小屋ニ閉居シ十四五人ノ韓人生徒ヲ集メ形許リノ私塾トシテ教授ヲ開始シ候処恰モ日露戦争ハ開カレ運策ノ如何ニ依リテハ大ニ面白ク相成ベクト思考候ニ付御承知ノ金淇玉ヲ説キ郡守ヲ吾党ニ引入ルヽ策ヲ講ジ漸次目的ヲ達スルニ至リ候ヒシ故昨年十月中金淇玉ノ名ヲ以テ韓国側ノ有志ニ一私立学校ヲ起サシメ中央政府ノ許可ヲ得テ旧砲舎ト称スル大建物ヲ校舎トシテ貰受ケ小生ノ学校ヲ合併シテ遂ニ日韓人共立ノ一学校ヲ成立セシメ候[49]

金淇玉をはじめとする韓国人有志に学校を発起させた時点で義成学校を名乗ったものと思われるが，この学校は名目だけであり，はっきりいえば韓国政府から「旧砲舎ト称スル大建物ヲ校舎トシテ貰受ケ」るための方便にすぎなかった。義成学校の実体は，渡辺の学校と合併し日韓人共立となって初めて生じたのである。渡辺自身，「金淇玉ノ学校ハ素ヨリ名目許リノモノナレバ合併ノ結果唯ダ一箇ノ廃屋ヲ貰受ケタルニ止マリ……」[50]と述べている。

その後渡辺は，この「廃屋」を修理するために奔走，韓国人からの募金と日本人資本家からの借金によって資金を調達し，1905年7月校舎修築工事に着手，12月に竣工させた。この間，「郡守ニ迫リテ官衙ノ古建物二棟ヲ表面上借受ノ名ヲ以テ貰受ケ……右古官衙二棟ハ十戸ノ貸長屋トナシタルガ当時日本人ノ移住者多カリシ為メ案外ニモ一ケ月家賃七十円ヲ得ルコトヽ相成リ高歩ノ利子ヲ支払フモ尚学校ノ経費ヲ補フノ余金ヲ生ズルノ好結果ヲ得候」とか「先頃好機会ニ投ジ一年百余円ヲ収入スベキ一漁場ヲ手ニ入レ申候」[51]といっているように，理財の才を存分に発揮している。

義成学校の教師は，渡辺本人と金淇玉および渡辺の長女信子であり，1905年12月当時の教育体制は次のとおりであった。

当学校ノ学科ハ四ケ年級ニ編制シ一，二年ヲ尋常小学科トシ三，四年ヲ高等小学科トシ日語（読方，話方，綴方）算術，体操，唱歌，地理，歴史，理科ト定メ日本現行ノ国定教科書ヲ用ヰ全然日本小学校ト同一程度ニ教授シ居候ヘ共年長ノ古参生ニハ課外トシテ経済，商業，法制等ノ大意ヲ授ケ居申候生徒学力ノ進歩ハ非常ノモノニテ古参生三四名ハ談話，文章等全ク日本人同様ニテ中学三，四年生位ノ学力ハ確カニ有之候目下ノ在籍生徒ハ五十六名出席生徒四十三名ニテ内一年生三十名，二年生十四名，三年生八名，四年生四人ニ御座候ガ唱歌及会話ノ初歩ハ小生ノ長女信子ヲ受持教師トナシ居リ候[52]

これによって，「日本小学校ト同一程度」を基本としつつも，この当時すでに中学レベルの教育内容が一部加味されていたことがわかるが，翌1906年3月には，「小学を超越して中学および師範制度を希望する」ほどになっていたことは先にみたとおりである。

このような校勢伸張の傾向と，渡辺自身が前掲通信の末尾に「小生モ家族ヲ引纏メ永住ノ決心ヲ致シ候」[53]とその決意のほどを披瀝しているところからして，義成学校はその後も相当期間存続したものと推測される。

11. 咸興学校（日進学校）

咸鏡南道咸興の咸興学校は，1905年2月12日に開校された。時恰も日露戦争の真っ最中であり，「我ガ北進軍隊ノ将校殊ニ中村大尉ノ熱心ナル勧誘助力ニヨリ咸興府内有志韓人ノ創設ニ係ル」[54]ものであった。つまり同校は，日韓の有志によって創立され，運営資金も両者によって用意されたのである。そして，この咸興学校の創立・運営を援助したのが木村宇太郎であった。木村は，「小生モ任務ノ閑ヲ利用シテ同校創立ノ事ニ参与シ」「教頭ハ仮リニ小生之レニ当リシガ（なお校長は咸興郡守李喬永――稲葉註）幸ニ当地在住者中ニ三十年間日本ニ在リテ教鞭ヲ執リタル野尻久太郎氏アリ乃チ小生推薦シテ教頭候補トナセリ」[55]といっている。このように木村が，「任務ノ閑ヲ利用シテ」「仮リニ」教頭の職に任じたのは，もともと彼の本務は東亜同文会立城津学堂の堂長であり，当時，ロシア軍南下に伴って避難中の身であったからである。

咸興学校の目的は，日韓両語を以て普通教育を授けることであった。木村が報じた開校直後の教育体制は次のとおりである。

校務モ日ヲ逐テ整頓シ小生始メ日語教師野尻久太郎氏以下漢文教師トモ日々登校授業ニ従事シ居リ生徒ハ学力ト年齢トニヨリ甲乙二組ニ分チ甲ハ二十名乙ハ三十五名合計五十五名ノ出席者アリ年齢ハ十歳以上二十五年以下ニテ何レモ多少漢文教育ノ素養アリ且ツ皆ナ地方有力者ノ子弟ノミナリ学科ハ甲ノ組ハ会話，歴史，地理，算術，作文，修身，漢文等ニシテ乙組ハ会話，読書，習字，算術，作文，漢文，体操遊技等ニシテ之ヲ日本ノ学科ニ対比スレハ甲ハ尋常中学程度乙ハ尋常小学程度ナリ(56)

咸興学校開校の翌月（1905年３月），日本軍が城津一帯のロシア軍を駆逐するに至ったので，木村は，３月末日限りで同校を辞し，城津に復帰することになった。したがって，それまで教頭候補であった野尻が，自動的に教頭に昇格したであろう。

ところがこの野尻も，同年10月，城津近郊の鶴坪に日語学校が設立されるにあたり，その教師として招聘された。ちなみに木村宇太郎は，「矢田少佐ノ発企ニテ鶴坪ニ一ノ日語学校ヲ起サントテ郡守ヲシテ寄付金募集中ノ処早ヤ千円許リ集リシニ付来ル十日ヲ以テ開校スル由教師ニハ元咸興私立日語校ニ在リシ野尻氏ナリ」(57)と，この時初めて咸興学校が日語学校であったことを明言している。

木村に続いて野尻も去ったが，咸興学校の運営はなお日本人教師の手によって継続されたようである。1906年12月31日付の『皇城新聞』には，「咸鏡南道概況（続）」と題する次のような雑報記事がある。

学校は公立普通学校，私立日進学校，私立光進学校があり，……日進学校は，昨年二月に日本大尉中尉（ママ）稲彦氏が咸興郡守と尽力して創立したもので，六十五名の生徒を収容し，……皆日本教師を雇聘し，……

ここでいう日進学校が，創立年月といい日本大尉の尽力といい，咸興学校のそれと一致する。したがって咸興学校は，上の報道以前に日進学校を正式校名にしたものとみられる。この学校は，その後も暫くは存続したであろう。なんとなれば，開校直後の55名から1906年12月には65名へと，生徒数漸増，少なくとも安定の傾向が認められるからである。

12. 木浦日語学校・育英中学校

1899年6月，東亜同文会木浦支部が設立され，同支部において日語学校を開設することが計画された。この動きを捕らえて恒屋盛服は，東亜同文会立の木浦日語学校があったとしており[58]，後人に誤解を与えている。東亜同文会の木浦日語学校は，当時，韓国人教育事業に関して半島の南北を分担する旨の協定を結んでいた東亜同文会と大日本海外教育会（前者が北部，後者が南部）との間に合意が成立せず，つまりは海外教育会の反対にあって，結局計画倒れに終わったのである。

木浦にあった日語学校は韓人士商会社の設立で，その創立は1905年6月のことであった。しかし，この学校は，校長人事のごたごたのため間もなく廃校となった。そして，士商会社が新たに興したのが育英中学校である。したがって，木浦日語学校と育英中学校は全く別個の学校とみることもできるが，『木浦府史』に「此の日語学校は故ありて程無く廃したりと雖も，之に代るべく設けられたる育英中学校は」[59]云々とあるところから，育英中学校を木浦日語学校の後身とすることも可能である。

両校に関する最も詳しい資料である『木浦誌』の記述は次のとおりである。

韓半島に於ける我邦人経営の日語学校は，年を経ると共に各要地に数十校を建設せられたれば，独り我木浦に於てのみ起らざるの理なく，又日語普及のことは我対韓経営上の根本義たると同時に，鮮人社会に於ても日語を習得し普通学を研究することは正しく時代の要求と為りたるより，慈(ママ)に明治三十八年六月，我小学校長河瀬房次郎氏と務安監理との間に折衝を重ね，韓人問屋の組合たる士商会社の事業として同組合の事務所内に仮校舎を開設し，河瀬氏の義弟末松某氏教鞭を執りつゝありしが，韓人側に於ては当時木浦に在りたる前済州島牧使洪鐘宇氏（金玉均氏の刺客）を校長に推さんとし，河瀬氏にありては末松某氏を校長たらしめんとし，些々たる行き違ひより破談に終りたる以来，亦た鮮人の為に此種の計画を試むる日本人なし。

然るに士商会社は新に育英中学校なるものを起し，元木浦日本人小学校長たりし戸川真管氏を聘して教鞭を托し，生徒数二十名を有したるが，後ち同社解散と共に廃校し，今の木浦簡易商業学校に変形せり。[60]

13. 晋明学校

1906年の恐らく5月ごろ慶尚南道統営一帯を旅行した一日本人の紀行文に次のようなくだりがある。

晋州には夙に邦人の設立に成る日語学校あり近来固城にても韓人自から学校を設立して日本教師を聘用せりと云ひ又統営対岸の彌勒山龍華寺にては僧侶の間に日語学習の希望多く本願寺の僧を教師として傭聘の交渉中なりとか其他三千里(ママ)にても村上一郎なる人薬商の傍ら日語学校設立の企画中なりと云へり[61]

晋州の日語学校は晋明学校と称した。1905年8月28日付の『皇城新聞』広告欄に晋明学校の設立経緯と補助金拠出者一覧が出ている。それによれば，晋明学校は，韓国人有志数人が日本人吉村真治と協議して設立した当地最初の学校で，教科には日語および漢文・算術があり，教師は上原三四郎と崔興鉉の両名であった。また補助金拠出者としては，前・現観察使以下48名の韓国人と並んで8名の日本人の氏名が挙げられている。

この『皇城新聞』記事をベースとして上掲紀行文の記述を検証すると，両者の執筆時期からして晋州に「夙に」日語学校があったことは事実であるが，それが「邦人の設立に成る」とはいえない。吉村真治は晋明学校の賛成員で，校長はじめ他の役職は韓国人によって占められており，補助金の額も，韓国人に比べて日本人のそれは少額にすぎないからである。晋明学校は，韓国側に比重のかかった日韓人共立の学校であったというべきである。

晋州・晋明学校のほか，上の紀行文から固城にも韓国人設立の日語学校があったことが知られるが，彌勒山龍華寺および三千浦（三千里は誤りである）における日語学校設立計画は，その後実現したかどうか確かめえない。

14. 開興学校

公州・開興学校に関する記事が『皇城新聞』にただ一度だけ登場するが，その内容は次のとおりである。

忠南観察使が学部に報告するに，本道浄土宗開興学校会長任昌宰の請願によれば，蓋しこの浄土宗の教えは，韓日両国交際上の敦睦とおおいに関係するも

のにして，会校を創設し，全国人民をして従善捨悪の心を開導し，もって効忠報国，尽忠竭孝に至るべし。本校において漢文日語算術及び各国歴史地理維新体操演説等八条目を教育し，将に効果を見んとするので，学部に転報して認許せしめよと……[62]

これによって知ることができるのは，開興学校が浄土宗立の学校であったこと，「韓日両国交際上の敦睦」「効忠報国」「尽忠竭孝」といった言葉に示されるように，単なる宗教の枠を越えて政治的な目的ももっていたこと，日語をはじめとする8教科を教えたこと，「将に効果を見んとする」という報道が1906年5月26日であるので，開興学校はこの少し前に設立されていたこと，などである。

一方，統監府の『韓国事情要覧』(1906年7月刊)によれば，開興学校は「韓国ニ於ケル日本人教育事業」のひとつであり，その目的は「韓人教育并居留民教育」，程度は尋常小学科，生徒20人，教員2人であった[63]。われわれはここで初めて，開興学校が日語学校の範疇に属したと判断することができる。というのは，『皇城新聞』が報ずるように開興学校会長が韓国人任昌宰であったにせよ，「韓人教育并居留民教育」を目的とする学校は，当然のことながら日本人教師の日本語による授業を中心としたからである。

15. 成川日語学校

1906年6月発行の雑誌『韓半島』に掲載された紀行文「平元の道中」に，平壌～元山を「旅行中日本商人を見しは唯だ日語学校の設けある成川郡に於て鎮南浦より出張せしてふ一商人を認めしのみなりき」[64]という一節がある。これによって，当時すでに平安南道成川に日語学校が設けられていたことがわかり，さらに，この日語学校の存在が，日本商人の内陸部進出に有利に作用したであろうことが窺われる。

日本側の資料で成川の日語学校に触れたものはこれだけであるが，一方，韓国側資料としては次のような新聞記事がある。

成川郡守チョ鼎允氏は，学校を設立して一般児童をただ日語をもってのみ教授せしめ，他の学科はないので，該郡紳士らが皆曰く。外国語学は普通学校の一課程にすぎず，尋常小学の外国語学は世界に未だないから，今，入学児童に

ただ外国語学のみ教授し，算術・修身・地誌・歴史などを全廃することは学規に合わないと。だが，同氏は，頑としてこれを聞き入れない。(65)

この成川郡守チョ鼎允設立の学校が，『韓半島』にある日語学校を指しているものと思われる。日語学校に対して外部から普通学の教授が要求されていたことを示す一例として留意すべきであろう 。

16. 昇明学校

『木浦誌』は，木浦における韓国人教育事業を叙述する枕詞として次のように記している。

我全南に於ても木浦開港以来光州，済州，霊光，咸平，長興，順天其他諸要所に日語学校若くは之と相彷彿すべき日本人経営の学校各地に勃興し，其事業として未だ大に見るべき程のものは之れあらざりしと雖も，而も是等有志の尽力に依りて我全南の鮮民に好感化を及ぼし，他年邦人の経営に幾多の便宜を与へたる功労に至りては決して埋没すべからざるものありしを疑はざるなり。(66)

すなわち，光州・済州・霊光・咸平・長興・順天などに「日語学校若くは之と相彷彿すべき日本人経営の学校」があったというのである。しかし，その内実が把握できるのは，光州の東本願寺立光州実業学校と順天の昇明学校だけであり，済州・霊光・咸平・長興の日語学校については，その存在を指摘するに止めざるをえない。

1906年10月20日付の『皇城新聞』に，開校直後の昇明学校の状況を伝える次のような雑報記事がある。

全羅南道順天郡前委員金貞鉉氏が，教育に熱心で，昇明学校を郡中に創設し，校勢を拡張するが，教育を自己の義務として経費を独力で弁じ，日本教師矢野氏を招聘し，郡守李承宇氏はこれを賛成監督するので校況が盛んとなり，学生が雲集する。学資に窮する者には食費まで施すので，周囲がこぞって称賛するという。

これによって，昇明学校が1906年10月初旬ごろに設立されたであろうこと，

その経費は金貞鉉が独力で負担し，苦学生には食費まで支給したこと，教師は日本人矢野某であったことなどがわかる。したがって昇明学校は，教育そのものはともかく，財政的には『木浦誌』のいうような「日本人経営の学校」ではない。

続いて『皇城新聞』の1907年1月7日付は，教師の氏名が矢野隆荘であることを明らかにするとともに，金貞鉉の挙に倣って隣接諸郡でも学校が設けられつつあることを報じている。昇明学校は，順天郡においてのみならずその隣接諸郡にとっても，いわばモデル・スクールだったわけである。

金貞鉉の活躍はその後も続いた。1909年5月発行の『大韓興学報』の報じるところは次のとおりである。

全南順天郡紳士金貞鉉氏は，時勢の変遷を明察し民智の未開を痛歎して，自己の財産をなげうって測量学校と日語学校を組織し，少年子弟を養成するという。順天の勃興は，該氏の熱心によって実現されるであろう。(67)

ここにある日語学校が，いうまでもなく昇明学校であり，昇明学校は，少なくとも日韓併合の直前まで順天発展の起爆剤として嘱望されていたのである。

17. その他の日語学校

恒屋盛服は，1904年5月から7月にかけて見聞した韓国各地の日語学校開設の企図を次のように報告している。

平安道中和，安州，定州ニハ各日語学校開設ノ希望アリ宣川郡ノ如キハ郡守某最モ日本ノ勢力ヲ信ジテ語学校ノ開設ヲ希望シ中央政府ノ特許ヲ得テ郡中ヨリ其費用ヲ支出セント欲シ日根野兵站司令官ト数次打合セヲナシ已ニ教師招聘ヲ日本人某ニ依頼シ越シタリト云フ又義州ニハ求是学校ノ存立セルニモ拘ハラス官立日語学校ヲ開設セントシ忠清道天安ニテモ土地ノ有志郡守ト謀リテ語学校ヲ興サントシ京城大官ヲ誘導シ寄附金ヲ募集セリ(68)

このうち，その後実際に日語学校が設立されたことが確認されるのは，安州・定州・宣川および義州である。

まず安州に関しては，1905年10月29日付の『大韓毎日申報』に，安州郡官衙

のいくつかの老朽建物を取り壊し，その材木の一部を日語学校と病院の窓や床の用材に回したという雑報記事があり，これ以前に日語学校が設立されていたことが知られる。材木の用途をめぐって日本軍の関与が窺われるのが，日語学校に対する日本軍の支援という意味で注目される点である。同じく『大韓毎日申報』の1906年1月31日付広告欄に安州安興学校補助金支出者一覧があるところから，安州の日語学校が安興学校と称したことを知ることができる。

義州における日語学校開設の企図は，官立日語学校ではなく私立専対学校として結実したようである。『皇城新聞』1906年4月6日付に次のような記事がある。

義州居白寅善氏の書翰によれば，甲辰臘月，該郡枇峴面に私立専対学校を創設し，学員を募集して日語算術法律政治等の学課を教授することとし，日本人浦木実也浦木彌楠の二人が名誉教師として熱心教誨するが，本郡守金璉植氏と監理李敏伝氏が数百円ずつ捐助し，有志人金有鉉金志闇高丞巘の諸氏が出義捐補するので校況が盛んであるという。

「甲辰臘月」は1904年陰暦12月であるから，専対学校は，上の恒屋報告からほどなくして創設されたことになる。また，文中の郡守金璉植は，官立日語学校誘致を主張した郡守（具完喜）[69]とは別人である。郡守の交替が，官立日語学校から私立専対学校への計画変更をもたらしたものと思われる。

一方，1906年5月発行の雑誌『韓半島』は，当時の一進会学校の開設地を列挙しているが，その中に安州・義州・定州・宣川が含まれている[70]。一進会の母体である維新会の創立が1904年8月であるから，時期的にみて上の恒屋報告にある日語学校開設の企図そのものと一進会とは無関係である。しかし，恒屋が指摘した6ヶ所のうち安州・義州・定州・宣川の学校がその後一進会立となった可能性は否定できない。一進会は，日語学校設立運動や既存日語学校の経営に便乗し，あるいはこれを乗っ取ることも少なくなかったからである。

このほか，平壌近郊の龍巌浦と慶尚北道東上面にも日語学校があった。統監府の調査によれば龍巌浦日語学校は，1905年7月の創立で韓人教育並びに居留民教育を目的とし，1906年度現在，ひとりの教師の下で37名が学んでいた[71]。慶尚北道東上面の日語夜学校については，1907年7月末，統監伊藤博文が外務大臣林董にあてて次のように通報している。

慶尚北道東上面李家熙外数名ノ発起ニ係リ枝村聖廟所在地ニ開設シタル夜学校ハ目下学生六十余名アリ専ラ日本語ヲ教授シ追々盛況ヲ呈セリ然ルニ世ノ進運ヲ忌ミ旧慣ヲ墨守スル儒生輩ハ之レカ排斥ヲ企テ異国語学校ヲ聖廟地ニ設クルハ在天ノ吾夫子ニ対シ恐懼ニ堪ヘス宜シク之ヲ他ニ移転セシムヘシトノ檄ヲ配付シ多数ノ同志ヲ召集シ協議スル所アラントセシヲ以テ韓国警務署ニ於テ説諭シタルニ反省スル所アリ集会ヲ中止シタリ(72)

ところで，上の資料をいくら読んでも学校の正式名称は不明であるが，実はこのような校名不詳の学校は，とくに日露戦争後，韓国各地に少なからずあったのである。たとえば1905年11月の『東亜同文会報告』は，大邱における「日語学校ノ新設」と題して，「日語ノ普及ハ韓人亦其必要ヲ感シ日語学校ノ設立ヲ企ツルモノ多ク既ニ当地ノ一富豪ハ単独ニテ別ニ日語学校ヲ起シ候此他邦人ノ経営ニ係レル夜学校等モ大低(ママ)十四五名ヨリ二十名位ノ生徒アリ尚ホ其他ニモ学校設立計画ヲナスモノアル模様ニ候」(73)と報じている。

以上，日本側の資料を基礎とし，韓国側資料を斟酌しながら各日語学校の輪郭を描いてきたが，これら以外に，旧韓末の代表的新聞であった『皇城新聞』と『大韓毎日申報』に散発的に登場する日語学校を次に列挙し，その存在のみを指摘しておきたい。そもそも日語学校の確固たる定義があるわけではないが，校名に「日語」を冠するもののほか，記事の内容から日本語を主たる教育内容としたもの，教師陣の全部あるいは中核を日本人が占めたものも日語学校と判断してここに掲げた。( ) 内は当該学校に関する初出記事の出所であり（したがって，必ずしも当該学校の設立時期とは一致しない），いうまでもなく「皇」は『皇城新聞』を，「大」は『大韓毎日申報』を指す。なお，正式校名が不明のものは，なるべく叙述内容に忠実を期しつつ，筆者が適宜命名した。○部分は，印刷不鮮明のため判読不能の文字である。

ソウル南門内倉洞・尹学栄の私設日語学校（皇 1899. 1. 26）
ソウル小安洞・私立日語専修学校（皇 1899. 7. 31）
ソウル銅峴・漢陽学校（皇 1899. 12. 15）
京畿道観察府・車時敏の私立日語学校（皇 1900. 12. 18）
清州郡・金○培の私立日語学校（皇 1904. 5. 10）
晦○・崔東燮の日語学校（皇 1904. 11. 17）
平安北道観察府・白楽三の日語学校（皇 1904. 11. 26）

金海・金海日語学校（大　1905. 1. 16）
ソウル・権ジュンソクの日語夜学校（大　1905. 2. 11）
慶尚北道仁同郡・宮崎豪雄の私塾（皇　1905. 3. 4）
ソウル官立日語学校内・私立日語夜学舎（皇　1905. 5. 31）
平安南道江西郡・江西郡日語学校（皇　1905. 7. 5）
ソウル東署中谷・皇城義塾（皇　1905. 7. 21）
鎮川郡・閒川日語学校（皇　1905. 8. 24）
ソウル西小門内・私立普通日語学校（大　1905. 8. 30）
ソウル・女子日語学校（皇　1905. 8. 31）
ソウル中校義塾（中橋義塾か――稲葉註）内・私立日語専門永成夜学校（皇　1905. 9. 2）
平壌・金応龍の私設学校（大　1906. 1. 20）
ソウル明洞・大東真宗教会日語学校（皇　1906. 2. 13）
坡州郡・光興日語学校（皇　1906. 2. 22）
ソウル南署後洞・普興義塾（大　1906. 3. 2）
ソウル・警務庁日語学校（皇　1906. 3. 16）
ソウル南署松峴・日語研究学校（皇　1906. 3. 28）
萬頃郡・郭址昶らの私立学校（大　1906. 5. 2）
黄海道平山郡雲川洞・張寅汲の日語学校（皇　1906. 6. 1）
海州府・金泳澤らの日語義塾（皇　1906. 7. 10）
通津・光進学校（大　1906. 9. 18）
ソウル華東小学校内・日語夜学講習所（大　1906. 10. 19）
黄州兼二浦・光東学校（大　1906. 11. 15）
永登浦・尾上龍嘘らの日語学校（皇　1906. 11. 29）
穏城郡・普興学校（皇　1907. 1. 7）
楊州・楊州日語学校（大　1907. 3. 28）
楊州郡・阿部新の日語学校（皇　1907. 4. 11）
ソウル中署廟洞・金敞鎮宅の日語夜学科（皇　1907. 6. 21）
京畿道安山郡草山面・私立日語学校（大　1907. 10. 23）
ソウル・学部日語講習所（皇　1907. 11. 12）
ソウル東関国民教育会館内・日語講習所（大　1907. 11. 30）
ソウル・宮内府韓日語研習所（皇　1908. 2. 14）
京畿道観察府・李圭桓宅の日語夜学科（皇　1908. 4. 21）

ソウル・洪運杓宅の日語夜学校（大　1908. 5. 30）
ソウル南部芸洞・柳興奭宅の日語私塾（大　1908. 9. 29）
ソウル北部斎洞・日語講習所（皇　1908. 9. 30）
ソウル・韓相鶴宅の日語夜学校（大　1908. 11. 18）
黄海道殷栗・富田某の私設日語学校（皇　1909. 1. 19）
ソウル・南章熙宅の日語講習所（大　1909. 1. 30）
ソウル光化門外・永敦学校（大　1909. 2. 3）
ソウル南大門内暘洞・日語専門講習所（大　1909. 3. 7）
ソウル・度支部韓日語講習会（皇　1909. 4. 15）
ソウル養正義塾内・日語夜学講習所（皇　1909. 5. 22）
ソウル諫洞・日語研究会（皇　1909. 6. 11）
ソウル小安洞・趙鳳植宅の日語夜学科（大　1909. 6. 30）
ソウル北部三清洞・○紅義塾（大　1909. 7. 29）
甑山公立甑山普通学校内・韓利殷の日語夜学科（皇　1909. 10. 6）
ソウル西部暘谷・日語専門講習所（大　1909. 10. 30）
永柔郡・日語専門学校（皇　1909. 10. 30）
ソウル・官立漢城高等学校職員日語講習会（皇　1910. 1. 13）
ソウル南部詩洞・私立薫陶日語夜学校（皇　1910. 1. 13）
ソウル三興学校内・日語夜学研究会（大　1910. 1. 14）
陽城郡徳山面・日語夜学講習所（皇　1910. 2. 5）
義州郡・金道濬らの日語夜学校（皇　1910. 4. 15）
ソウル輔仁学校内・日語講習所（皇　1910. 6. 9）
ソウル大東専門学校内・日語講習所（皇　1910. 6. 16）
ソウル普成専門学校内・日語講習所（皇　1910. 7. 1）
ソウル興士団内・日語研究会（皇　1910. 8. 23）

これらの諸学校につき，リストの順に従って若干補足説明を加えたい。まず最初に挙げた尹学栄の私設日語学校であるが，新聞には「昨日尹学栄氏が，南門内倉洞に日語学校を私設することにし，学部に転報して適当な章程と例規を請うた」とあり，実際に開校されたかどうかは確かめえない。この点，日本女子大卒の田中友枝がソウルに設立することになっていた女子日語学校，日本人平田某が学部に認許申請中であった楊州日語学校，楊州郡守に対して設立を請願していた阿部新の日語学校も同様である。

このように，日本人が創立に関与した学校の中には，その後の開校如何の不明なものがいくつかあるが，開校されていたことが確実なものも少なくない。慶尚北道仁同郡にあった宮崎豪雄の私塾，官立日語学校内の私立日語夜学舎，永登浦の尾上龍嘘らの日語学校，黄海道殷栗の富田某の私設日語学校がそれである。私立日語夜学舎を設置し，その監督の任に当たったのは，当時の官立日語学校教官田中玄黄であった。

この私立日語夜学舎が官立日語学校内にあったように，とくにソウルの日語学校には，独立の校舎を持たず既存の学校に間借りする形で開設・運営されたものが多い。私立日語夜学舎のほかこのタイプに属するものとして中校(ママ)義塾内・永成夜学校，華東小学校内・日語夜学講習所，養正義塾内・日語夜学講習所，甑山普通学校内・日語夜学科，三興学校内・日語夜学研究会，輔仁学校内・日語講習所，大東専門学校内・日語講習所，普成専門学校内・日語講習所がある。なお，三興学校内・日語夜学研究会と大東専門学校内・日語講習所は，後に統合され，上掲リストにある興士団内の日語研究会となっている。

ついでながら，上掲リスト中に「研究会」と称するものが3つあるが（ソウル諫洞・日語研究会，三興学校内・日語夜学研究会およびその後身たる興士団内・日語研究会），これも一種の日語学校と見做すことができる。なぜならば，研究会も「日語を教授」し「学員」を募集していた[74]からである。さらにいえば，当時は，「学校」と雖もその実態は講習所や講習会と大差ないものが少なくなかったのである。

1906年3月に開設された警務庁日語学校は，韓国人巡査に日本語を教えるための施設であった。韓国人官吏を対象とする日本語教育機関がまず警務庁内に設立されたことは，統監府（1906年2月1日開庁）による韓国統治の性格を窺わせるものとして興味深い。上掲リスト中これに類するものが，学部日語講習所，宮内府韓日語研習所，度支部韓日語講習会，官立漢城高等学校職員日語講習会である。このようないわば官立日語学校に準ずる施設は，他の官庁や官立学校にもあったであろうが，それを裏付ける資料は見出しえない。

ところで，宮内府と度支部のものは最初から「韓日語」を看板に掲げており，学部の日語講習所も後に「韓日語講習会」となっている[75]。これは，韓国人官吏の日本語講習と並行して日本人官吏の韓国語講習も行なわれていたことを意味する。そもそも日本人は，全体として韓国語学習に冷淡であったが，その中にあって相対的に熱心だったのは官吏層（警察官・教員を含む）であった。

最後に，海州府の金泳澤らの日語義塾は，『皇城新聞』1906年7月10日付の

初出記事に登場する人名が同16日付の「碧城義塾任員及賛成員」名簿とかなり一致するところから，碧城義塾と称したものと思われることを付言しておく。

おわりに

本稿を結ぶにあたり筆者が改めて強調したいのは，洛淵義塾(後に普光学校)の日語学校としての性格規定である。勿論，民族系私学と日語学校とは必ずしも相対立する概念ではないが，これまで韓国では，洛淵義塾を民族系私学とすることによって，同校における日本人の関与や日本語教育の比重を不当に軽視してきた嫌いがあることは否定できない。筆者としてはこの通説を修正し，旧韓末の教育における日本語・日本人の位置付けという重要問題の解明へ向けてひとつの足掛りとしたい。

一方，筆者自身の従来の見解にも訂正を要する点がいくつかある。本稿の叙述順でいけばまず開揚学校に関して，この学校の存在を知ったこと自体が新たな知見であった。上掲拙稿⑥の東萊日語学校関係部分は，同校の開揚学校への改編をベースとして解釈し直さねばならない。

義成学校に関しても同様で，拙稿⑨の執筆時点で筆者は，統営日語学校が一旦消滅して義成学校という別個の学校が発足した事実を知らなかった。また，統営日語学校の設立・運営をめぐって東本願寺の役割を強調し過ぎた憾みがある。この2点を，ここに訂正する。

開興学校については，拙稿⑭において単にその存在を指摘するにとどまっていた。この学校が日語学校であったことを明らかにしたのは，筆者にとって一歩の前進である。

自説訂正の第4点として，ソウルの官立日語学校内にあった日語夜学舎については拙稿⑦⑧の中で触れているが，それが私立学校であるという認識が不充分であった。すなわち，同学舎は，事実上後の官立漢城外国語学校速成科の先行形態ではあったにせよ，やはり当時の官立日語学校とは切り離してひとつの私立日語学校とすべきだったのである。

さて，従来の先行研究によれば日語学校は34校あったとされ，その時期的・地理的分布や設立者・生徒の階層・教育内容などもすべてこれに基づいて立論されている。しかし，本稿序文に固有名詞を挙げたものだけでも43校にのぼり，本論で述べたものを合わせれば120校を優に越える。このほか，一進会系の学校が一時100余校を数えたともいわれており，要するに日語学校は，定説より

も遙かに多かったのである。したがって，日語学校全体としての構造・特質は根本的に再検討しなければならないが，これについては稿を改めて詳論することにする。

（1）『皇城新聞』1899年12月26日
（2）資料によっては福地「達三」あるいは「辰次郎」としているものもあるが，最も頻繁に登場するのは「辰蔵」である。
（3）渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第27巻　渋沢栄一伝記資料刊行会　1959年　p. 83
（4）『教育時論』　第560号　1900年11月5日　p. 35
（5）信夫淳平『韓半島』　東京堂書店　1901年　p. 131
（6）京畿道教育研究院編『京畿教育史（1883～1959）』　京畿道教育委員会　1975年　p. 183
（7）李萬珪『朝鮮教育史』下　乙酉文化社　1949年　p. 71
（8）朴尚萬『韓国教育史』中巻　大韓教育聯合会　1957年　p. 52，呉天錫『韓国新教育史』　現代教育叢書出版社　1964年　p. 111，孫仁銖『韓国近代教育史』　延世大学校出版部　1971年　p. 30 など
（9）『皇城新聞』　1904年9月20日
（10）　同　　上　　1906年9月11日
（11）統監府総務部内事課『韓国事情要覧』　1906年　p. 28
（12）『東亜同文会報告』第17回　1901年4月　p. 73
（13）阿部宗光・阿部洋編『韓国と台湾の教育開発』　アジア経済研究所　1972年　p. 42
（14）『近衛篤麿日記』付属文書　鹿島研究所出版会　1969年　p. 323
（15）『教育界』第4巻第10号　1905年8月　p. 87
（16）(12)および『東亜同文会報告』第19回　1901年6月　p. 111
（17）『教育界』第4巻第10号　pp. 87-88
（18）『近衛篤麿日記』では鶴谷「正」隆となっている。(『近衛篤麿日記』付属文書　p. 323)
（19）酒井政之助編纂・発行『発展せる水原』　1914年　p. 12
（20）渡部学「二十世紀初期朝鮮における私立学校と書堂」『兵庫農科大学研究報告』第2巻第2号　1955年　p. 118
（21）『東亜同文会報告』　第59回　1904年10月　p. 11
（22）『大韓毎日申報』　1905年2月24日
（23）幣原坦『朝鮮教育論』　六盟館　1919年　p. 61
（24）『韓半島』　3号　韓半島社　1904年3月（渡部学　前掲論文　p. 118　より再引用）
（25）同　上　（同　上　p. 126　より再引用）
（26）(24)に同じ
（27）(21)に同じ
（28）『教育界』　第3巻第6号　1904年3月　p. 137
（29）幣原坦　前掲書　p. 62
（30）酒井政之助　前掲書　p. 16

(31) 慶尚南道教育委員会編・発行『慶南教育史』 1980年 pp. 101-103
(32) 相沢仁助編『釜山港勢一班』 日韓昌文社 1905年 p. 225
(33) 『大韓毎日申報』 1907年5月4日
(34) 『東亜同文会報告』 第59回 pp. 12-13
(35) 同 上 pp. 14-15
(36) 松宮春一郎『最近の韓国』 早稲田大学出版部 1905年 p. 279
(37) 『大韓毎日申報』 1906年3月14日
(38) 外務省編『日本外交文書』 第40巻第1冊 日本国際連合協会 1960年 p. 570
(39) 大野謙一『朝鮮教育問題管見』 朝鮮教育会 1936年 p. 10
(40) 『東亜同文会報告』 第59回 pp. 15-16
(41) 『教育界』 第4巻第10号 1905年8月 pp. 87-88
(42) 松宮春一郎 前掲書 p. 279
(43) 『実験教授指針』 第3巻第7号 1904年4月 p. 112
(44) 『大韓毎日申報』 1908年2月12日
(45) 松宮春一郎 前掲書 p. 279
(46) 『東亜同文会報告』 第59回 p. 13
(47) 同 上 第38回 1903年1月 p. 79
(48) 同 上 第45回 1903年8月 pp. 61-62
(49)(50) 同 上 第74回 1906年1月 p. 3
(51) 同 上 同 上 p. 4
(52)(53) 同 上 同 上 p. 5
(54) 同 上 第64回 1905年3月 p. 54
(55) 同 上 同 上 p. 55
(56) 同 上 同 上 p. 56
(57) 同 上 第71回 1905年10月 p. 21
(58) 恒屋盛服『朝鮮開化史』 博文館 1901年 p. 370
(59) 木浦府編・発行『木浦府史』 1930年 p. 473
(60) 木浦誌編纂会編・発行『木浦誌』 1914年 pp. 222-223
(61) 『韓半島』 2年第3号 1906年6月 p. 120
(62) 『皇城新聞』 1906年5月26日
(63) (11)に同じ
(64) 『韓半島』 2年第3号 p. 194
(65) 『大韓毎日申報』 1906年11月24日
(66) 『木浦誌』 p. 221
(67) 『大韓興学報』 第3号 1909年5月 p. 66
(68) 『東亜同文会報告』 第59回 p. 17
(69) 同 上 同 上 p. 15
(70) 『韓半島』 2年第2号 1906年5月 p. 190
(71) (11)に同じ
(72) 外務省編 前掲書 p. 570
(73) 『東亜同文会報告』 第72回 1905年11月 pp. 23-24
(74) 『大韓毎日申報』 1910年1月14日, 3月29日
(75) 『皇城新聞』 1910年3月5日